柏樹

題字
南　勇　会長
川口市退職校長会
会報　第２４号
令和４年２月１日

パリ　美術館巡り

髙橋　英治

社会科の教師をしていた頃、世界の国々の自然や歴史を教えていて、その国を訪ねたいと思っていました。しかし残念ながら、実際には行かれませんでした。退職後、時間もとれ出かけられるようになりましたが、最初の頃は慣れないので、海外のツアー旅行に参加しました。回を重ねていくうちに美術館巡りが楽しくなりましたが、新型コロナの影響でこの２年間は全く海外旅行は行かれなくなりました。そこでコロナの流行直前に行った旅の思い出を紹介します。

数年前は、ツアーによるパリの観光地を巡る旅行でした。今回は２度目でもあり、美術館を中心とした個人の旅を計画しました。往復の飛行機、宿泊のホテルのみを予約し、ホテルはパリの中心にあり、交通の便の良い地下鉄の駅の近くに連泊しました。パリは近年、フランス語でなくても英語でも多少通じるようになり、ガイドブックを見ながらののんびりした旅でした。

１日目は、セーヌ川の左岸にある印象派の殿堂オルセー美術館を見学しました。この美術館はパリ万博の時に建てられた駅舎を改良したものです。マネ、モネ、ルノワール、ゴッホ等、日本人にもたいへん人気のある画家の絵がたくさんあります。日本の美術館で見学した時は、雑踏の中で肩越しに見る有様でした。しかし、オルセー美術館では、静かな雰囲気の中で足を止め、ゆっくり見学できました。

２日目は、オランジェリー美術館に出かけました。オレンジの温室を改装したオランジェリー美術館は、モネの睡蓮が特に有名です。二つの楕円形からなる大広間の壁いっぱいに８点の絵が掲げられています。印象派の画家の中でも光の変化を追求し、天井から自然の光が降り注ぐ空間は、まさに自然の中にいるようです。

最終日は、パリから列車で約45分かかるジヴェルニーに行きました。モネは43歳の頃から88歳で亡くなるまでこの地で絵を描き続けました。当時のまま保存されている家にはたくさんの日本の浮世絵が飾られていました。黄色を基調にしたダイニングルームには、食器も同色で統一されモダンでした。

近くのセーヌ川から引いた池には太鼓橋が架けられ、周囲には柳や竹林が茂り、水面には睡蓮が咲いていました。

美術館巡りの旅を終え、日本に帰ってくると、浮世絵や日本庭園等の日本の伝統文化に、より一層良さを感じることができました。

教育における不易と流行

川邊　秀明

文部科学省は、「これまでの我が国の150年に及ぶ教育実践の蓄積の上に、最先端のＩＣＴ教育を取り入れ、これまでの実践とＩＣＴとのベストミックスを図っていくことにより、これからの学校教育は劇的に変わります。」とコメントして、昨年末、ＧＩＧＡスクール構想の実現に向け舵を切った。

今、子供たちは一人一人に用意されたパソコンを駆使し、学習の幅を広げたり、自分の考えを深めたりしている。遠く離れた相手とも、お互いの意見を交換したり、共有したりもしている。

私が教員になりたての頃、先輩の先生から「教育には不易の部分と流行の部分がある。何が不易で何が流行なのか、きちんと把握しておくこと」とご指導いただいたことを思い出した。

先日、２年生のかけ算の授業を見た時のことである。黒板には「（　）と（　）を入れ替えても答えは同じ」と書かれている。括弧には、（かけられる数）と（かける数）が入る。乗法の交換法則である。ふと見ると一人の児童が悩んでいる様子だったので「どうしたの？」と声を掛けた。「先生、かけられない数は、どうしたらいいの？」と問い掛けられた。「えっ、かけられない数？」初めて聞く言葉だった。授業後、話をよく聞いて説明してあげると、少し安心した様な顔になった。

一般社会でも意見を聞くなどして相手のことをよく理解して対応しなければ、良好な人間関係を構築することは難しい。教育者は、子供たちの考えをよく聞いて助言しなければ、適切な指導をしたとは言えないのではないか。

端末を操作する一方、古来より受け継がれている「かけ算九九」の暗唱には、現代っ子も黙々と繰り返し取り組んでいる。まさに不易の部分である。

若い頃、先輩の指導を受けて、現行の指導要領と新しい指導要領の読み比べをよくやった。変わらない部分と新しい部分を発見した時は、達成感を感じた。また、ゆっくり学習指導要領の解説書を読んでみたくなった。

～～日々雑感～～

教育相談員として

瀬山　真一

昨年度、お陰様で定年退職を迎えることができ、川口市立教育研究所の教育相談員として再出発いたしました。

教育研究所では、不登校に関する相談や性格・行動・発達に関する悩みなど様々な相談を受けております。

私の職務は、主に「適応指導教室」と「子ども教育相談」です。「適応指導教室」には、学校に通いにくくなってしまった小・中学生が通ってまいります。教科の学習、スポーツ活動，各種体験等を通して自己を発揮する場を設定し、一人一人の自信回復を図っております。私は理科の授業、創作活動を担当しており、26年ぶりの授業を日々楽しく行っております。教室で児童・生徒の前に立つと新鮮な緊張感が生じ、様々な発見があります。校長として全校生徒の前に立つ緊張感とは別の感覚を味わうことができます。

授業は小学生にも行いますので、中学校を専門としていた私は、最初は戸惑いの連続でした。普段は、小中別の教室で授業を行いますが、場面によっては、小中一緒に授業を行うことがあります。小学校4年生と中学校3年生を同時に対象とする授業では、様々な工夫が必要で教材研究にも一生懸命取り組んでおります。

適応指導教室で自信を回復し、各自の学校に復帰していく児童生徒が複数おりました。送り出す側として本来嬉しいことではありますが、同時に別れの寂しさも感じます。

「子ども教育相談」は、主に不登校で悩む保護者の相談が中心となります。保護者の揺れ動く気持ちがひしひしと伝わってまいります。

不登校に関しては、今までの教職経験が生かせる部分もございますが、なかなか答えが見つかりません。正解はないのでしょうが、少しでも正解に近づけるようたくさんの参考文献を読み続けています。

退職後、このような職場で複数の退職校長と一緒に働けることは、この上ない喜びでございます。一人でも多くの相談者に適切な相談ができるよう今後も精進してまいりたいと思っております。

たどり着いた場所で

吉田　明美

「将来は高校の日本史の先生に…」

高校生の時に、古文書を朗々と読み上げる年配の女性の先生に憧れて、将来はこてこての歴女になるはずだったのに？かろうじて中学校の社会科の教師からスタートしたものの、中学校、小学校、そして現在は縁あって幼稚園へと。あれれ？高校で古文書を読み上げていたはずの人生設計は、成就しなかった。しかし、中学校ではやりがいを見つけた。小学校は教育の原点だと知った。いえいえ、幼児期が人間形成の原点だったのだと気づくことができたのは、たどり着いたおかげかな。

現在、勤務している公立幼稚園では、自主性の育成を大切にしている。見たり、実際にやってみたりすることから自分で工夫したり、友達と相談しながら発想を広げて、自分から進んで行うことの楽しさを遊びの中から学んでいる。自然環境にも恵まれているので、毎日虫取りや土手で遊んだり、作物を育てたりと、健康な心と体づくりを進めている。また、県内でも有数の連携教育が行われているので、同じ敷地内にある小学校、中学校との交流活動は数えきれない。様々な交流を通して、「生涯にわたる学びに向かう力」が育くまれるのだと、連携教育のありがたさを実感しているところである。

もし、自分の子供の頃に交流教育があったら、もっと人と関わる力がついていたのになあ。でも、学校教育に携わったおかげで、リスペクトする姿をたくさん見ることができたからよかったかな。中学校では、学校をリードする3年生の頼もしい姿、小学校の縦割り活動では、6年生が下級生を優しくお世話する姿に感動した。幼稚園でも、5歳児が3歳児や4歳児をお世話したいという純粋な気持ちが、本人たちの自己有用感を高めている。

今もリスペクトの毎日である。毎日のように虫取りをしている子からは、いろいろな虫の名前を教えてもらっている。洋服をはじめ身の回りのグッズがすべて電車の絵である子からは、どんな電車がどこを走っているのかを説明してもらった。恐竜の名前をすらすらと諳んじる子の姿に、将来は「○○博士」になっている姿を想像している。好きなことに夢中になることは、生きる喜びをもって、人生を豊かに歩むことにつながることを幼児の姿から再確認できることがありがたい。

たどり着いた場所で、「好きなことをもう一度やってみよう」と、少し思えたことに感謝している。

環境などの変化から教育の道へ、そして、45年あまりが・・・

門田　宣明

人間とは面白いもので、住む環境や人との触れ合い方により、人生が変わっていく。小学校の卒業文集に、将来の職業は「サラリーマン」、理由は「気楽だから」とあった。父がサラリーマンをしていたことも影響したかもしれない。

東京・品川に生まれ育った。幼稚園、小学校、中学校、高校全て公立学校へ

通った。幼稚園の時は隣の家が火事になり、怖い経験をした。小学校では、アジアで初めてのオリンピックが東京で開催された。中学校では、都立高校の学校群制度が施行され、希望する高校へ進学できなかった。

高校では、大学紛争に巻き込まれ、話し合いが続き、授業は行われず、理数系の大学で数学の研究をする夢は消えた。大学受験に失敗し、子供のころから料理に興味があり、料理人になろうと決めた。そして、一流ホテルで修行することになった。その時、親友に「やっぱり大学へ行こう」と誘われ、親などからも「大学を出てからでも料理はできる。」と言われ、再度受験した。幸い、国立大学の教育学部に入学できた。当初は、「将来は料理人」という気持ちもあり、卒業できればと軽い気持ちでいた。

４年になり、小学校へ教育実習に行った。その実習で、子供の希望に満ちた笑顔が、私を教育の道へと導いた。小４の担任として初赴任した。成りたての頃は、料理でいう醤油（隠し味）で、子供を生かす教育に心掛けた。そのうち、自分の思うままに子供を指導し、少し有頂天になっていた。２年目に考え方の違う人たちから屈辱を受け、一時は挫折した。頭の中で「こんな教育では、子供たちの将来は危うい」と危機感を覚えた。これを機に教育の道を究めていく決心をした。

多くの方からご指導をいただき、特に、３人の先輩の教育への姿勢を糧とし、学級、教科、学年経営へと自分なりに力量をつけた。こうして、野望は高まり、「その道に入ったら、極め、長になる。」という自負に従い、仕えた校長先生、特に３人の校長先生の王道学を基本に学校運営、経営へと教育理念を確立していった。

校長２年目に、屈辱を受けた考えに対し、対抗できる力を付け「借りは返した。」という気持であった。退職後も教育相談員として、不登校等の子供に現役時代とは違い「年を取ったら丸くなる」の如く、穏やかに接することを心掛けた。そして、教育生活45年が過ぎた。

今は、私にとって孫のような子供を、今までの恩返しとして支援している。この先、どんなことができ、どのようになるか楽しみである。

火山の噴火がもたらすもの

伊東和幸

最近、沖縄の海に軽石が大量に漂着している事が話題になっています。

さて、この軽石はどこから来たものでしょうか。それを調べたら、なんと東京の南方約1500㎞にある小笠原諸島付近の福徳岡ノ場海底火山でした。その火山が、明治以降最大の噴火を起こしたからです。

戦後の日本付近の海底火山に限ると明神礁、西之島、千石海丘、福徳岡ノ場、海徳火山、薩摩硫黄島があります。

この中で、特に知られているのが、明神礁、西之島です。

明神礁は、東京の南方約420㎞に位置する海底火山、特に1952年～1953年の大爆発では、調査に入った海上保安庁水路部の調査船が噴火に巻き込まれ、31名の命が失われたこの時の噴出物は、流紋岩質軽石で粘性があり、火口から流れ出て堆積したようです。

次に、比較的新しく噴火したのが西之島です。東京の南方約960㎞、父島西方の約130㎞にある無人島です。1973年すぐ側の海底で火山活動が始まり新島ができ、その後、西ノ島と接続し、現在でも島の一部として存在しています。過去の西之島の噴火でも、小笠原諸島でも大量の軽石が漂着しました。

そして、今話題の軽石を噴火で放出した火山が福徳岡ノ場で、位置は東京の南方約1300㎞に位置し、明治以降に３回新島をつくっています。最新の噴火が2021年８月13日に起きたもので、戦後で最大級の規模のものでした。

また、この噴火で放出された軽石や火山灰は、少なくとも約１億㎥（東京ドームの容積のおよそ80個分に相当）最大で５億㎥と見られています。

その影響は、1300㎞以上離れた沖縄や奄美で噴出したと見られる軽石が漂着したようです。

過去をたどると、1986年にも同じ火山の大噴火があったが、今回に噴火は、当時と比べても、桁違いに大きいものでした。

今回の噴出した漂流物の影響で、10月中旬から沖縄本島北部、奄美群島では大量の軽石がビーチや港を埋め尽くし、漁船、定期船や巡視船などもエンジンの冷却装置が軽石を吸い込み、オーバーヒートの恐れがあるので出航を見合わせるなど、日常生活にも支障が出てきています

さらに、この影響は軽石などの漂流物が黒潮にのり、四国沖、本州沖へと向かうとすると、漁業、海上交通や海水を使う発電所などにも影響が及ぶ恐れも出てくると思われます。

前述までの事は、海底火山の噴火についての事ですが、火山は陸地にもあり、噴火した場合には大量の軽石や火山灰が噴火の規模によりますが、広範囲に飛散します。例えば、富士山が江戸時代の宝永噴火の規模で、冬の時期に噴火すると15日間の累積降灰は、横浜で10㎝、新宿区で１㎝～1.5㎝あり、次のようなことが心配されます。①停電、②信号の誤作動、③エンジントラブル、④水質汚染と水道への影響、⑤発電所、⑥灰の除去、⑦健康被害などです。

火山噴火に伴う被害対策も、日頃から行なっておく必要があるのです。

教育情報

「運動好きで、心も体もたくましい児童の育成」

川口市立上青木南小学校
校長　清水健治

一　はじめに

本研究は、埼玉県教育委員会指定事業「体力課題解決研究指定校」、川口市教育委員会委嘱「体力向上に関する研究」を受け、令和元・２年度（新型コロナの影響を受け、３年度まで実施）に実践研究したものである。

令和元年度の新体力テストの結果は、埼玉県の体力標準値と比較すると、男子・女子ともに半数以上の項目で下回る結果であった。児童アンケートから、学年が上がるにつれて体育の学習が嫌いな児童が増え、嫌いな理由として「うまくならないから」「苦手意識があるから」が多い。また、課題を達成できなくてもそのままでよいと考え挑戦する意欲が低い児童が多い。以上のことから、研究主題を設定し、仮説と具体的な手立て講じて研究を進めた。

二　研究の実践内容

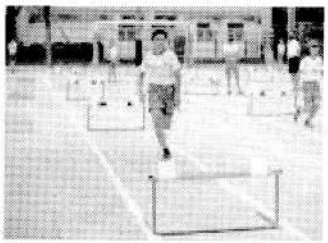
（ア）マット運動

【身につけさせたい技能の明確化】

技の合格基準や到達度を伝え、その段階にあった練習方法を提示し、児童が自分の段階に合った練習方法を選択できるようにした。

（イ）ハードル走

【場の工夫（見える化）】



ハードルに画用紙を取り付け、足の裏で蹴ることやハードル前に新聞紙を置き、踏まずに走り越すことなど児童が意識するべきポイントを見える化することで、課題意識をもちやすくした。

（ウ）表現リズム遊び

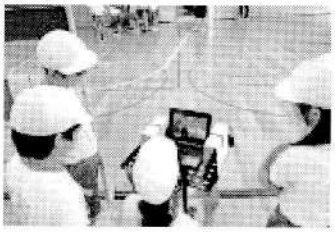
【体育学習カードの効果的な活用】

できるようになった動きを記録し、伸びが実感できるような学習カードを用意し、自分の現状をつかめるようにした。

（エ）ゴール型ゲーム

【伝え合う時間・場の確保】

ＩＣＴを用いてゲームを撮影し、その映像と知識として得た良い動きを基に伝え合いをすることで、チームの動きを客観的に見て、効率的に深い伝え合いができるようにした。



（オ）幅跳び

【明確な相互評価の視点を与える】

評価の視点を明確化することで跳び方のポイントを友達にもアドバイスしやすくした。

（カ）さわやかタイム（業間運動）の工夫・改善

体を動かす楽しさや心地よさを味わわせることと体力向上を図るため、年間を通して計画的に業間運動を実施した。校内の遊具を使ったサーキット運動を開発し、体育の授業導入時や休み時間に取り組んでいる。季節・行事に応じて、パワーアップタイム、ランランタイム（持久走）、なわとびタイム（個人跳び、８の字跳び）等を行っている。

本校では、新型コロナ対策として１組と２組の日課をずらしている。朝学習と昼学習の実施時間をずらすことで、休み時間の密を防ぐ効果があるとともに、全校の半数児童が運動場で外遊びを行うことができ、運動好きの児童増加に向けた本校独自の取組である。

三　研究発表会の概要

当日の公開では、２種類（ドッジボールラリー・上南の柱）の「さわやかタイム」を全校児童による業間運動を最初に実施した。続いて低中高学年３学級による体育科の公開授業を行った。全体会では県教委からの指導、国士舘大学教授　細越　淳二先生による講演会でこれからの体育授業についてご指導いただいた。

四　研究の成果

○新体力テストの結果から総合評価が令和元年度と比較すると令和３年度には大きく上昇し、全国平均を上回った種目数の割合も大きくアップした。

○アンケートの結果から、「体を動かすことが好きな児童」「体育の学習が楽しい児童」「課題意識をもって活動する児童」が全体で九割を超え、多くの項目で大きく向上した。

五　おわりに

研究を通して　日々の体育授業のさらなる質の向上を図ること及び児童が楽しみながら継続的に体力向上を図ることができるような業間運動や業間遊びの工夫・改善を一層図っていくことが重要であると考える。本校は、体育の研究を積み上げてきた学校ではないが、環境設定や指導法に様々な工夫を加えることで運動好きな児童をさらに増やしていきたいと考えている。

編集後記

ご多用の中、玉稿をお寄せいただいた皆様に心より御礼申し上げます。

年度末の時期、新型コロナが広がり始めて丸２年。年度末から新年度にかけての様々な行事が縮小や中止になり、清爽な気持ちで１年の節目を迎えられない。「早くコロナが収束してほしい。」と祈るばかりです。　（村田文男）